

3. 計画の課題

(1) 中心市街地との関連性からみた課題

① 中心市街地における芹ヶ谷公園の位置づけの検討

町田市中心市街地整備構想(2014年3月策定)では、中心市街地に近接する芹ヶ谷公園とのつながり強化の方向性が打ち出されている。その中で歩行者アクセスの充実として、文学館通りの歩道拡幅、無電柱化、さらに公園へのシンボルロードの形成として、原町田大通りの延伸などが挙げられている。

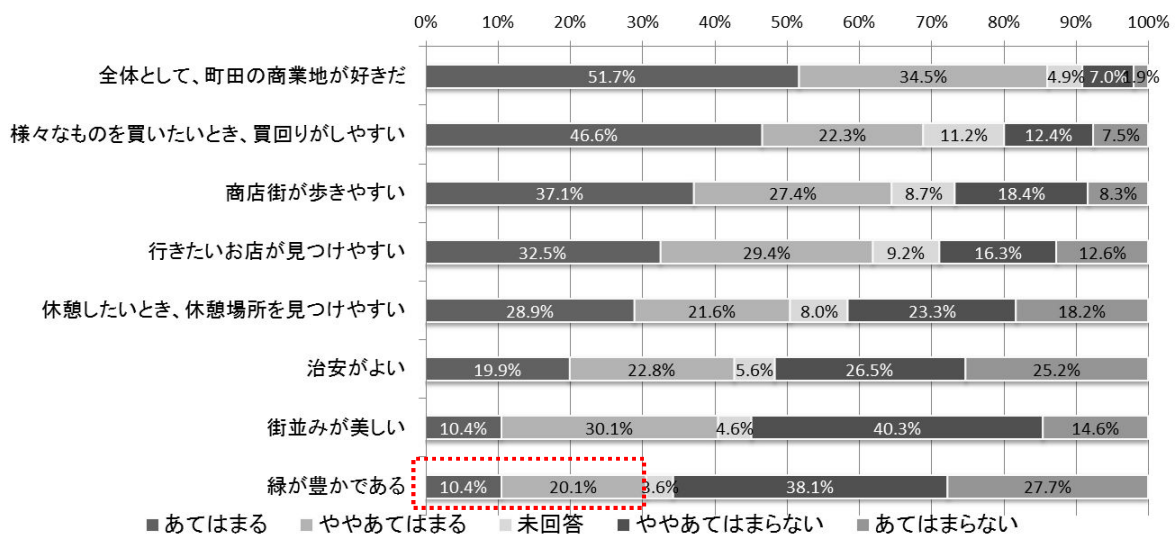
2013年8月に実施された町田駅利用者街頭アンケートでは、駅周辺の商業施設に対する印象について、「緑が豊か」というのは低評価で、回答者の約3割にとどまっている。芹ヶ谷公園は中心市街地に近接しているが、駅周辺施設とは認識されていないと考えられる。

芹ヶ谷公園は中心市街地の活性化において重要と位置づけられているが、現状では中心市街地との一体性が感じられていないことが課題である。

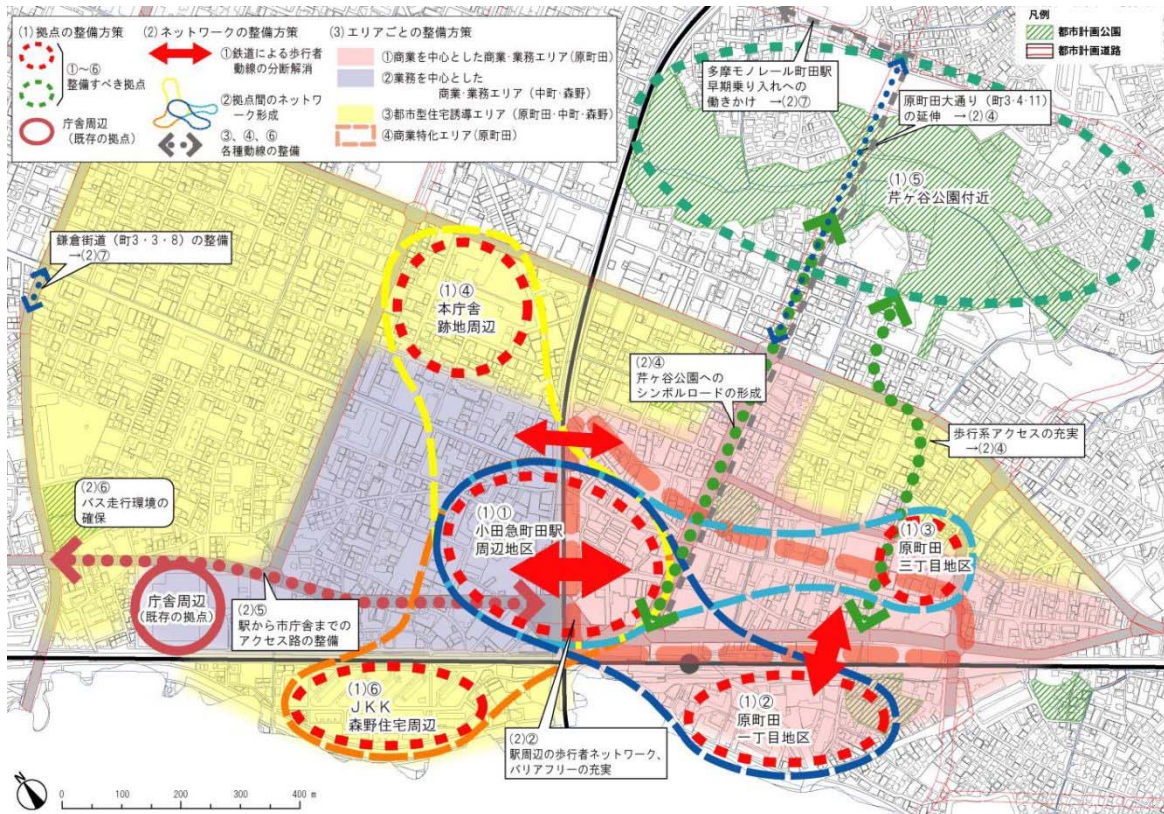


原町田大通り（町3・4・11）

【参考】町田駅利用者街頭アンケート結果（町田駅周辺商業地を利用するにあたっての評価）



■ 中心市街地整備方針図



出典：町田市中心市街地整備構想（2014年3月）

② 中心市街地のまちづくりと一体的な再整備

2013年5月～7月に実施された中心市街地整備構想検討の意見交換会では、「ショッピングモール感覚で吉祥寺駅から井の頭公園までのルートのように回遊性を高められるとよい」という意見があった。

中心市街地活性化において歩行者の回遊性促進は有効な方策であり、市街地に近接する芹ヶ谷公園は回遊性を誘発する大きな核である。芹ヶ谷公園の再整備は、文学館通りの整備と一体的に行っていく必要がある。さらに原町田大通りでのアートストリート、ストリートファニチャーの展開などによって芹ヶ谷公園への回遊性も検討すべき課題である。



文学館通り（左）と歩道の埋め込みサイン（右）

(2) 植栽の配置に関する課題

①木の密度や高木と低木のあり方の検討

公園の樹林及び植栽木は、四季の移ろいなど季節感や癒しを感じる上で重要な要素であるとともに、野鳥を始め生態系の保全にとっても重要な役割を果たしている。一方で、植栽木の高密度等でできた死角、枯れ枝の飛散・枯木による倒木事故など、利用者の安全確保にとって植栽の適正な配置、管理は重要である。

谷戸を利用した公園で、斜面には落葉広葉樹林の二次林（雑木林）やスギ、サワラの植林、実生で育った常緑樹、さらに谷戸の園地には公園木として植栽された高木、低木が数多く存在し、開園後長い年月が経過している。

このようなことから、植生の状況を踏まえながら、見通しを確保するために支障となる樹木の処理（伐採、枝など剪定、移植等）や、間伐などで密度調整し、利用想定を前提にして、明るく開けたエリアなどを形成していく必要がある。

※伐採とは樹木を伐り倒すこと。間伐とは成長に伴って混み過ぎた樹林の樹木を一部抜き伐りすること。

②昼間でも暗いうっそうとした雰囲気改善

遊具周辺、トイレ周辺、園路沿いなどでは見通し確保が必要である。また、夏、冬の日照条件や方位などに応じた樹林や植栽木について、暗く見通しが悪いなど問題のある場所については、改善が必要である。

現場での調査・確認結果をもとに、支障となる樹木の処理（伐採、枝など剪定、移植等）により、うっそうとした雰囲気を改善して明るい空間づくりを行う必要がある。



園路の周囲は一定の見通しが必要

③四季折々の見所の創出

園内にはソメイヨシノやヤマザクラのほか、イロハモミジ、ヤマモミジなどの紅葉を楽しめる樹種も多い。このほか花の美しいユリノキ、ハウノキ、ツバキ、ウメなどの高木、アジサイ、アベリア、ツツジ類などの四季を感じさせる低木も多い。

一方で、美しい地被類や草花などの植栽、花壇などがなく、面的にまとまった季節の彩り、四季折々の見所があるという印象は薄い。

花壇等を配置し、四季を感じさせる空間づくりを行う必要がある。

（３）新しい楽しみ方の創出のための課題

①食事ができる施設の充足

現在、町田市立国際版画美術館にある飲食施設では、公園再整備、（仮称）町田市立国際工芸美術館建設後の利用者増加や中心市街地との回遊性促進には不十分であると考えられる。公園利用の魅力をより高めるためには、新たな飲食施設の導入について検討する必要がある。

②隣接する八幡平遺跡を「地域の歴史」として学べる施設の検討

計画対象地に近接した高ヶ坂地区には高ヶ坂石器時代遺跡（縄文式時代中期の敷石住居跡）があり、1926年（大正15年）に国史跡に指定されている。このうち、八幡平遺跡は計画対象地に最も近く、直径3.45mの円形プランの敷石住居跡が発掘されている。

地域の歴史を学べる施設として、本公園内に展示施設を整備することは意義があり、施設の配置、内容等を検討していく。

③芸術の杜にふさわしい整備と（仮称）町田市立国際工芸美術館の調和

（仮称）町田市立国際工芸美術館については、施設の配置、建築デザイン等において、公園と調和した整備を図っていく。

④子どもたちの安心・安全な遊び場環境の提供

子どもの遊び場として、現況では多目的広場や冒険広場が設置されているが、冒険広場は施設の老朽化や周辺からの見通し確保などの課題がある。子どもが集い、賑わいを高めるためにも、公園のリニューアルを検討する必要がある。

なお2014年（平成26年）9月に自然と子どもの冒険心を融合させた新しい施設としてNPOによる冒険遊び場の運営がスタートした。様々なプログラムを展開し、子どもが「やってみたいと思うこと」を実現しながら、限りない好奇心と貴重な自然体験ができる場となっている。



2014年（平成26年）9月23日にオープンした「せりがや冒険遊び場」

（４）アクセス性の向上

①安全かつ快適なアクセスの検討

本公園は、谷戸の地形を活かした公園であるため、特に高齢者や幼児にとって坂道、階段などによる公園へのアクセスに課題があるという指摘がある。また、JR 町田駅から公園のサクラ並木口までの距離約 700mについても、高齢者、幼児にとって負担となる。

さらに、交通の多い町田街道を横断すること、公園の位置がわかりにくいという意見もあり、より安全かつ快適なアクセスができるようにしていく必要がある。

②案内看板の整備など楽しみながら歩ける工夫

サインは、ピクトグラムなどデザイン化することで単なる案内看板ではなく、街を楽しんで歩く役割を果たす。芸術の杜としてふさわしい芹ヶ谷公園へ誘導するには洗練されたサインが必要であり、中心市街地で統一されたデザインをもとに整備していく必要がある。

③新たな駐車場用地の検討

現在、公園の駐車場は、町田市立国際版画美術館入口付近にあり、普通車 30 台と障がい者用駐車区画 1 台の計 31 台である。

大型駐車スペースはないため、大型車を利用した学校や団体での利用、観光での利用ができず、必要に応じて公園以外の場所での待機利用となる。今後の公園、美術館利用者の利便性向上と利用者数の増加を図るため、新たな駐車場の整備等を検討する。



公園駐車場

④新たな交通手段の開拓

町田駅からのアクセスについては、公園や美術館まで距離があり、徒歩圏としてはやや遠いことから、送迎バスの運行が求められている。

今後、回遊性や利便性の向上を図るため、バス運行の社会実験を実施する等、費用面なども考慮しながら適切な交通手段を検討していく必要がある。

（５）防犯、防災機能の充実

①死角の解消、夜間の暗さの改善などの治安向上

植栽の配置に関する課題に関連し、特に遊具や園路周囲においては、植栽による死角が公園利用者の他、通勤・通学としての利用者に不安を与えている。見通しを確保するため、伐採や園路沿いの過密樹林地の改善などを図っていく必要がある。

また、園内の防犯対策として防犯連絡設備の設置、照明の配置の検討、照度の点検などを行う必要がある。



遊具やトイレ周辺の死角の解消が必要

②大規模災害時の避難拠点として防災機能の充実

芹ヶ谷公園は、災害時に一時的な避難や安全確認を行うために集合する避難広場に指定されており、これに対応した安全なアクセス路の整備、防災公園施設（かまどベンチ、防災あすまや、防災トレイなど）、給排水施設、防災無線などの通信機能整備を公園再整備に合わせ、進めていく必要がある。

特に避難スペース、避難順路、物資搬入路、備蓄機能についての検討が必要である。

（６）公園予定地の活用

①町田荘跡地の活用

町田荘跡地については、様々な要望やアイデアがあり、それらを整理するとともに、（仮称）町田市立国際工芸美術館との関係性を含め、新たな導入施設を検討していく必要がある。



町田荘跡地

②都営跡地の活用

都営跡地は、谷戸の上部にあり、その広さや開放感など、これまでの芹ヶ谷公園にない場所である。この開放感のある空間の魅力を引出し、魅力的な活用を検討していくことが求められている。



都営跡地